

# 伝統に生きる

—あらかわの工芸技術—



たん  
鍛

きん  
金

なが さわ きん じ ろう  
長 沢 金 次 郎

(号 巧益)

(平成元年度作品)

16mm映画・ビデオ  
カラー・18分

## プロフィール

住所、荒川区荒川3-7-4。

明治40年(1907)、京都府生まれ。

昭和63年度荒川区指定無形文化財保持者に認定。

大正8年、12歳のとき、京都の足立喜巧氏に弟子入り。大正13年、17歳のとき、足立喜一郎氏(2代目)と上京。昭和8年、浅草合羽橋で独立。昭和26年、現在地に移転。

現在、機械製造された金属加工品が多く出回るなかで、銀・真鍮・銅などの金属板を鍛金して茶器類や茶釜や食器、花器類をこしらえている。後継者の息子・武久氏(昭和33年から従事)、孫の利久氏(昭和63年から従事)三代そろって仕事場で精魂こめでの毎日である。

「職人の生命は手。少しぐらいからだの具合が悪くても、手が動けば仕事をする」と語る、この道70年のベテランである。

企画 東京都荒川区教育委員会・製作 毎日映画社

## 用具・工具

金槌（ツチメ、ゴザメ、梨地など各種）、吹き台（ガス）、プレス機、金床、台切、蜂の巣、烏口、銚、ヤスリ、星突き（千枚通し）、木槌、ヤットコなど。



(用具・工具)

## 工程 —「花籠」の場合—

- (1) 図案をつくる。
- (2) 図案に基づいて、純銀の延べ板を籠の寸法に合わせて切る
- (3) 延べ板を槌で打ち出す。(鍛金)
- (4) 底の部分を鍛き出す。
- (5) ひずみとり（木槌で叩いて荒じめをし、ならし槌でひずみをとる）。
- (6) 胴の折り曲げ、木製の「当て」を当てがって木槌で叩いて荒じめをしたあと、ひずみとりを行う。
- (7) 編み線（銀線の「ひご」）づくり。  
純銀の延べ板を台銚で切り、「吹き台」でガスの炎により<sup>なま</sup>生す。
- (8) プレス（けとぼし）にかけ、カマボコ型に「ひご」を抜く。
- (9) 「当て」で「ひご」を短かく折り曲げる。
- (10) 「ひご」を編んでゆく。(編み方には作品によって、四つ目編み、ザル編み、アジロ編など様々)。この作品ではカゴメ編み（またの名は六つ目編み）。
- (11) 籠の縁を巻く。
- (12) 銀線を中に入れて把手をつける。
- (13) 仕上げ。



(金槌で打ち出す)



(完成した純銀製の花籠)

## 利用される方は…… ☎ 891-4349

この記録〈16ミリ映画〉、〈ビデオテープ〉は、荒川区荒川図書館で貸し出しています。

貸し出し期間は、1回5日間です。お気軽にご利用ください。

※16ミリ映画は、団体登録と16ミリ映写機講習修了者が操作することが必要です。